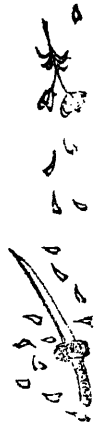


計るところありしが、この際、村岡は、深く國事を憂ひ、近衛公への執成は勿論、諸公卿の間に出入するの便宜をさへ與ふることを務め、隆盛をはじめ、諸士の盡力を助くること、少なからざりき。

(つづく)

我宿に春こそ多く來にけらし

咲ける櫻のかざりなれば



文苑  
狂女

上

ろすゐ



わはれ浮世のはかなさよ  
來ん幾年の末までも  
吾子と思ひ思はれて  
二人はいつも離れまじ  
よしや妾身は碎くとも  
御身に孝とし思はへば  
いかなる業も厭いじと  
堅く契りし甲斐もなう  
計らず御身はいつしかに  
とある男の子を便とし  
妾身を他處に捨小舟  
棹失ひし心地して  
よるべき方も白浪に  
浮び漂ふわはれさよ  
思へは長の年月日  
御身の膝元にまじりて

云いんとするも花のがま  
風ひきませせなやよ子よと  
妾がたえに纏ひつゝ  
今猶聞きつる心地して  
海より深き御身の恩

下

御身を恨むにわらねども  
兎や角思ひめぐらせは  
御身の御心いかにとも  
愛の母君母君と  
ゆられくゝてあの空の  
昔に聞きしあの聲を  
問ひ来てませややよ君よ  
學の道も誰が爲に  
いざ今日よりは徒に

雪の夕や霜の朝  
御身の着ませる御衣を  
おほせ玉ひし言の葉に  
山より高き御身の恩  
いかでか是を忘るべき

來ん年月や越し方を  
胸板さけん心地して  
妾はもとのまゝにして  
磯うつ浪によぶ子鳥  
君ぞ戀しと眺むれば  
今一度だに心あらば  
是ぞ此世の希望なる  
誰が樂みはたどるらむ  
消なん命をまつばかり

落る涙やよふ聲や  
學の庭を何處にしつ  
岸のあたりをそこはかと  
晝はひねもす夜もすから  
千々の思にやせはて、  
涙に劣る玉川の  
慣れし小笹を友として  
狂ひてありく少女あり

花見

東くめ子

花見ごろもを  
よそほひなせる  
花と色をは  
都大路を  
身にあらたへの  
わりごさげつゝ  
まことに花を  
うるはしく  
をとめらよ  
きははんと  
ねりゆくや  
布子きて  
ゆく子らぞ  
めづるらん